

学 位 請 求 論 文 要 旨

学 位 請 求 論 文 題 目

日本語と中国語の不定名詞句の対照研究  
—「誰か」、「ある人」と“有人”，“有个人”を中心に—

2020年7月

城西国際大学大学院 人文科学研究科  
比較文化専攻

由 志慎

## 1. 研究背景と目的

日本語の「誰か」、「ある人」と、中国語の“有人”，“有个人”は、いずれも不定を表す名詞句である。不定とは、聞き手が当該の指示対象を唯一には同定することができない(と話し手が想定している)場合に用いられる指示のことである(建石 2017: 3)。

日本語教育の現場では、初級段階は言うに及ばず、通訳・翻訳レベルにある上級段階になっても、学習者が“有人”・“有个人”のどちらにも「ある人」を使用することで、日本語の運用上・訳語上のミスを犯すケースが少なくない。これは中国語母語話者が“有人”，“有个人”とそれぞれに対応する日本語との対応関係・非対応関係が理解・把握できていないからだと考えられる。

現場で使用されている日本語教科書において、日本語と対照できる学習者の母語である中国語による文法説明があれば、学習者は正確に文法項目を理解でき、その結果、誤用減少の効果が生じ、同時に学習者は効率的に日本語を学ぶことができる。こうした方法は特に成人の学習者の場合に有効であると言われている(日本語教育学会 1982:78)。

そこで、本研究では、中国語母語話者への日本語教育のため、日本語と中国語の綿密な観察と比較・対照を通して、日本語の「誰か」、「ある人」と中国語の“有人”，“有个人”を中心に、両言語の不定名詞句における各々の意味・用法、個別言語内の使い分け、言語間の類似点と相違点を明らかにすることを目的とする。

## 2. 研究方法

本研究では、まず、記述言語学の方法を用いて、日本語の「誰か」、「ある人」と中国語の“有人”，“有个人”の意味・用法及び使い分けを研究した。次に、対照言語学の方法を用いて、この2対4形式の中国語と日本語の名詞句の対照研究を行い、両言語の対応関係を明らかにした。具体的に分析する際に使用する用例としては、日本語の場合は『現代日本語書き言葉均衡コーパス(オンライン版)』(BCCWJ-NT)から、中国語の場合は『北京大学中国語研究センターCCL コーパス』(CCL)及び『ビッグデータ及び言語教育研究所 BCC コーパス』(BCC)から採取した。また、日本語の『YAHOO』，『Bing』と中国語の『百度』から検索した用例も利用した。事例だけでなく、考察対象である2つの形式(例えば、「誰かが」と「誰か」、「誰か」と「ある人」，“有人”と“有个人”など)の間の置換によってできた用例、必要に応じて作例も利用した。

## 3. 各章における研究内容及び結果

本研究は以下の12章から構成されている。

第1章の序論においては、まず、問題提起をし、本研究の背景を示した。次に、本研究の対象を検討した上で、本研究の目的と取り組むべき課題を示した。最後に、本研究の構成を示した。

第2章においては、本研究の理論的枠組みを提示した。まず、記述言語学的立場から、指

示と名詞句の概念を提示したうえで、指示性の分類については、徐烈炯(1990:245)によって示された分類法を援用した。さらに、その分類された各々の概念について提示した。次に、対照言語学的立場から、張麟声(2016)によって提唱された「対照研究・誤用観察・検証調査三位一体」の研究モデルを援用し、学習者の母語言語との対照分析を行うことで、中国語母語話者を対象とする習得研究のための基盤を作るという本研究の位置づけを述べた。

第3章においては、日本語の不定名詞句の「誰か」、「ある人」、中国語の不定名詞句の“有人”、“有个人”に関する先行研究を整理し、先行研究の問題点と残された課題を示した。まず、日本語の不定名詞に関する先行研究において、建石(2017)は「誰か」のような「疑問詞+か」といった名詞句を「不定名詞」と呼んでおり、話し手が当該の指示対象を唯一に同定できるか否かを中心に、「特定」指示は話し手が同定することができる場合に、「不特定」指示は話し手が同定することができない場合に用いられるとしている。次に、聞き手が当該指示対象を唯一に同定できるか否かを中心に、「定」指示は聞き手が同定することができる(と話し手が想定している)場合に、「不定」指示は聞き手が同定することができない(と話し手が想定している)場合に用いられると定義している。さらに、「誰か」は「不定」指示及び「不特定」指示を、「ある人」は「不定」指示、「特定」指示及び「不特定」指示を表すと提示している。本研究では上述した建石(2017)に基づき、「誰か」と「ある人」のような「不定」指示を表す名詞句を「不定名詞句」と呼ぶ。

従来の研究では、建石(2017)のみが「ある人」の語用的な機能をめぐって詳しく論じているが、統語機能、情報構造、談話機能、文体などにおける「誰か」と「ある人」の意味・用法及び使い分けについての研究はいまだなされておらず、両者の指示性に関する検討も充分になされていない。

一方、中国語の不定名詞句に関する研究は、呂叔湘(1942)によって明確に提示されて以来、陳平(1987)、王紅旗(2004)、張斌(2010)などがあり、不定名詞句の表示形式としては、“数詞+(量詞)+名詞”(数詞+(助数詞)+名詞)、“一’+(量詞)+名詞”(“一’+(助数詞)+名詞)、“量詞+名詞”(助数詞+名詞)があると示されている。さらに、范继淹(1985)から始まった複数の研究により、“一’+(量詞)+名詞”を不定名詞句とした「不定名詞句主語文」の考察が続けられてきたが、“有人”と“有个人”に関連性がある研究は、動詞である“有”の意味と“有”構文に絞られている。これらの研究では“有人”、“有个人”を名詞句として取り扱っていないが、蔡維天(2004)と孟艳丽(2009)の研究では、“有人”は“有”という文法化された不定を表すマーカが連体修飾語として、名詞である“人”を修飾した名詞句の組み合わせであると示している。つまり、本研究の対象である“有人”と“有个人”は不定名詞句として扱われているということである。しかし、それ以降、“有人”と“有个人”に関する研究も、さらに、日本語の「誰か」、「ある人」と中国語の“有人”、“有个人”の対照研究についても、管見の限りほぼなされていない。

第4章においては、本研究の方法について述べた。

第5章においては、「誰か」の意味・用法を考察した。まず、「誰か」における「格助詞頭在型」

と「無助詞型」が併存するケースにおいて、「誰かが」と「誰か」、「誰かを」と「誰か」、「誰かに」と「誰か」の3対における「格助詞頭在型」と「無助詞型」の使い分けを考察した。その結果、「誰か」節に連体修飾語がある場合は、「格助詞頭在型」しか使えないこと。「誰か」節に連体修飾語がない場合については、「格助詞頭在型」と「無助詞型」が置き換えられる可能性の高さの程度を示すと、ガ格>ヲ格>ニ格の順となることがわかった。次に、「誰か」における「格助詞頭在型」のみのケースにおいて、「誰かと」、「誰かから」、「誰かより」、「誰かへ」の意味・用法を記述し、「誰か」の「無助詞型」に関しては普通名詞の「無助詞型」の可能な条件と若干異なることと、「誰か」は、「その誰か」という形で主題を表すことができるだけでなく、列挙をも表すことを明らかにした。本章では、「誰か」に関する考察を通して、書き言葉においても、普通名詞にしか見られなかった「無助詞型」が可能であることを明らかにした。

第6章においては、「ある人」の意味・用法を考察した。ガ格、ヲ格、ニ格、カラ格、ト格、ヘ格を伴う「ある人」と主題化した「ある人」の意味・用法を考察・分析した結果、次のことを明らかにした。まず、「ある人」においては、「無助詞型」がない。次に、「ある人」は格助詞によって、それぞれ動作主、変化の主体、動作の対象、移動の到着点などを表す。最後に、「ある人」は主題を表すのみならず、「対比」と「列挙」を表すこともできる。

第7章においては、第5章と第6章の考察・結果に基づき、構文的特徴、意味的特徴、主題化、談話的機能、指示性の性格と文体的特徴における「誰か」と「ある人」の使い分けについて、考察を行い、次のことを明らかにした。まず、構文上の特徴については、「誰か」には「格助詞頭在型」・「無助詞型」ともに存在するが、「ある人」には「無助詞型」はない。「誰か」と「ある人」ともにガ格、ヲ格、ニ格、カラ格、ト格、ヘ格、デ格を伴うことが可能である。次に、意味上の特徴については、「誰か」は集合の中の任意の一人を表すが、「ある人」は集合の中の特定の一人、あるいは、部分集合を表すことがある。「誰か」は「列挙」のみ表しうるが、「ある人」は「対比」・「列挙」ともに表す。次に、主題化については、「誰か」も「ある人」も主題化されると文頭に来る。次に、談話機能については、「ある人」は聞き手の存在が必要不可欠であるが、「誰か」は話し手の独話の場合もあり、聞き手の存在を必要としない場合もある。さらに、指示性については、「誰か」・「ある人」ともに「定」指示性はなく、いずれも「不定」指示という指示性を持つ。「誰か」は「不特定」指示のみ表しうるが、「ある人」は「特定」指示・「不特定」指示とも表しうる。「対比」を表す「ある人」には非典型的な「総称的」指示があるが、「誰か」にはない。最後に、文体的特徴については、法律文書の硬い書き言葉には「ある人」しか使用されず、「誰か」は使用されない。

第8章においては、“有人”を前部要素と後部要素に分けて、構文的特徴を考察したうえで、意味的特徴を明らかにした。まず、構文的特徴については、“有人”の前部には、名詞、副詞、名詞＋副詞、副詞＋名詞と主述連語が先行する。次に、“有人”の後部には、各種の動詞あるいは動詞句と“是”構文が後続する。一方、“有人”には形容詞句と名詞句も後続するが、制約がある。“有人……，有人……”構文と条件文の場合は構文上の制約が解消され、“有人”に後続することができる。次に、意味的特徴については、“有人”は、動作・変化・性質状

態の主体を表す。また、集合の中の任意の一人、あるいは一部を表すこともある。“有人……，有人……”構文における“有人”は「対比」あるいは「列挙」の意味を表す。

第9章においては，“有个人”を前部要素と後部要素に分けて、構文的特徴及び意味的特徴を考察した。まず、構文的特徴については，“有个人”には、名詞、副詞、名詞＋副詞、副詞＋名詞及び主述連語が前置する。“有个人”の後部には、動詞句、形容詞句、名詞句，“是”構文、述補連語が後置するが、形容詞句述語文と名詞句述語文は、複文の一部を構成する以外は単独では存在し得ない。これ以外には，“有个人……，有个人……”構文，“有个人……，有的人……”構文と“有个人……，代名詞／指示名詞＋是……”構文もある。次に、意味上の特徴については、まず，“有个人”は、動作主、変化及び性質・状態の主体を表し、集合の中の任意の一人を表すこともある。“有个人”は文の主題ともなりうる。“有个人……，有个人(有的人)……，有个人(有的人)……”構文における“有个人”は同一人物が行う複数の事項を列挙したり、複数の異なる人物が行う異なる事項を列挙したりする。

第10章においては、第8章と第9章の考察・結果に基づき、構文的特徴、意味的特徴、統語機能と指示性における“有人”と“有个人”の使い分けについて、考察を行った。まず、構文的特徴については，“有人”も“有个人”も、前に時間詞、場所詞、集合名詞、感覚あるいは思考を表す動詞及び感情を表す形容詞が先行してもよい。この場合は、両者は置き換え可能であり、意味は変わらない。“有人”・“有个人”ともに副詞が先行するが、複数回にわたり実施される動作を修飾する場合と複数の人によって実施される動作を修飾する場合に使用できるのは“有人”のみである。“有个人”は一回性の出来事の場合にしか使用できない。一方，“有人”に後続するものには複数回行われる動作も一回性の動作もある。また，“有个人”は“是”構文、形容詞述語文・名詞述語文ともに使えるが，“有人”は使いにくい。次に、意味的特徴については，“有人”は単数と複数を表すが，“有个人”は単数しか表さない。また，“有人”は「対比」も「列挙」も表しうるが，“有个人”は「列挙」しか表し得ない。“有人”は複数の異なる人物の動作を列挙するが，“有个人”は同一人物・異なる複数の人物の動作を列挙する場合もある。さらに、主題化については，“有人”は主語しか表示し得ないが，“有个人”は主語・主題ともに表示しうる。最後に、指示性については，“有人”・“有个人”ともに「特定」指示、「不特定」指示、「定」指示と「不定」指示という指示性を持つ。一方、対比を表す“有人”には「総称」指示があるが，“有个人”にはない。

第11章においては、意味的特徴、文法的特徴、指示性の性格、談話的機能、文体的特徴という5つのカテゴリから、日本語の「誰か」、「ある人」と中国語の“有人”，“有个人”について、対照分析を行ったうえで、「誰か」、「ある人」と中国語の“有人”，“有个人”の対応形式・非対応形式について、まとめた。まず、「対比」を表す“有人……，有人……”構文は日本語の「ある人は…，ある人は…」と完全に対応している。次に、条件文における主格である「誰か」，「ある人」と“有人”，“有个人”は基本的に対応する。さらに、日本語の連体修飾語が先行しない「誰か」と「ある人」が主語か主題である場合は、中国語の“有人”，“有个人”とは基本的に対応するが、それ以外の場合は、対応しない。最後に，“有人”と“有个人”が「特定」指示である

場合は、「ある人」と対応し、不特定指示である場合は、「誰か」と対応する。ただし、後部に“他们”（彼ら）のような複数を表すマーカーが付いているケースは、「ある人」・「誰か」ともに対応せず、「…人がいる」と訳さなければならない。

最後の第 12 章においては、本研究の結果のまとめを行い、本研究の意義について述べ、今後の課題を展望し、中国語母語話者への日本語教育に向けて示唆を示した。

#### 4. 本研究の意義

まず、本研究では、第 5 章において書き言葉をも考察の射程に入れ、「誰か」における「格助詞顕在型」と「無助詞型」の使い分けについて考察を行った結果、次の 3 点を明らかにした。①現代日本語においては普通名詞と同様に、不定名詞句にも「無助詞型」が存在する、②書き言葉にも「誰か」のような不定名詞句の「無助詞型」が存在する、③話し言葉・書き言葉ともに、「誰か」における「格助詞顕在型」と「無助詞型」の使い分けがある。これは現代日本語の無助詞の記述に資すると言えよう。

次に、現代中国語においては、従来の不定名詞句についての研究は、“一量名”（“一”+助数詞+名詞）に限られていたが、本研究は、“有(个)人”を中心に、“有(量)名”のような不定名詞句を対象に、考察を行った。本研究では、考察結果に基づき、従来の研究で提示された名詞句表示の 7 形式の上に、“有”+(量詞)+名詞→（“有”+(助数詞)+名詞）を提案した。これは現代中国語の名詞句表示に関する記述への補充となると言えよう。

最後に、学習者の母語言語との対照分析を行うことで、中国語母語話者を対象とする習得研究のための基盤を作る目的のもと、本研究で明らかにした以下の 3 点は日本語教育現場に適用できると考えられる。①「誰かが」と「誰か」、「誰かを」と「誰か」、「誰かに」と「誰か」の 3 対の使い分け、②中国人学習者が間違えやすい「誰か」と「ある人」の使い分け、③「誰か」、「ある人」と“有人”、“有个人”の対照分析をした結果に基いたこの 2 対 4 形式における対応形式と非対応形式の区別。

この研究成果が示すことが、中国人学習者向けの日本語教科書への提示・記載につながればと思う。本研究成果を反映した日本語教材の普及は、本研究で示した不定名詞句への十分な理解・習得を学習者に促すだけでなく、中国語母語話者を対象とした日本語教育に寄与することとなろう。

#### 5. 今後の課題

今後は、中国人日本語学習者の「誰か」、「ある人」に関する誤用を継続して観察することにより、さらに綿密な検証調査を行っていくことが課題として残されている。